

一つの読み

——遣新羅使人たちの悲別贈答歌について——

伊 藤 博

万葉集の巻十五は、遣新羅使人歌群一四五首と、中臣宅守・狹野弟上娘子が交した贈答歌六三首とによって成る。本稿では、この前半の歌群の冒頭に位置する悲別贈答歌一首全体のありかたについて、一つの読みを展開したいと思う。

巻十五前半の歌群一四五首が「秋」のうちに「妹」のもとに帰ることを主題とする歌物語的な歌群であり、それを最終的に整理した人が、やはり歌物語性を貫く後半の歌群の整理ともども、大伴家持であったであろうことについては、かつて論じた（『萬葉集の構造と成立下』第七章第一節）。この考えは今もって変更する必要に迫られていない。だが、この論述は、万葉集二十巻の構造と成立を視野に収めようとする目的の一環であったために、歌と歌、歌群と歌群との微細なかわりあいなどには及んでおらず、不本意な面が少なくない。そういう思いで歳月を過しているうちに、旧稿に対する批判も見られるようになった。中でとくに注目すべき論は、大浜真幸の「遣新羅使人悲別贈答歌十一首の構成」（萬葉第九十七号、昭

和五十三年六月）と、吉井巖の「遣新羅使人歌群」（日本古代論集、昭和五十五年九月）である。

それで、ここでは、主にこの二論を考慮しながら論を展開することにする。ただし、紙数の限定に応じて対象を悲別贈答歌一首に絞ったために、広範な吉井の論述の全体については触れられないことを、あらかじめおことわりしておく。

二

迂遠のようだが、悲別贈答歌一首を押さえるには、まず、巻十五前半歌群の冒頭の部分に対する井手至（「柿本人麻呂の羈旅歌八首をめぐる」万葉集研究第一集）の意見を聞く必要がある。

巻十五前半歌群の冒頭の部分は、

1 贈答十一首（三五七八～三五八八）

2 秦間満の歌一首（三五八九）

3 暫還私家陳思一首（三五九〇）

4 臨発之時作歌三首（三五九一～三五九三）

5 乗船入海路上作歌八首（三五九四～三六〇一）

船待ちの間大和に帰る歌

5 当所誦詠古歌十首（三六〇二～三六一一）
の五つの小歌群に分れ、四四首から成る。

4 の内容によれば、一行は、すでに備後の鞆の浦まで進んでいる。その最後の二首、

離れ磯に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも
（三六〇〇）

しましきも独りありうるものにあれや島のむろの木離れてある
らむ（三六〇一）

は、備後神島からの船出をうたう作（三六九九）に直結しているのだが、鞆の浦は、神島から一〇キロばかり西下した航路にあたることとて、この二首が、代匠記以来言われているように、大伴旅人天平二年（七三〇）の鞆の浦むろの木の歌（巻三、四四六～四四八）を踏まえていることはまちがいないと思われるからである。備後といえ、5 の古歌群を経たあとに、備後の国水調郡長井の浦（三原市糸崎港か）に船泊りする歌三首（三六一二～三六一四）が続く。神島から長井の浦まで約四〇キロ。神島に宿泊してそこを船出した一行は、鞆の浦を右に見つつ西下し、安芸との国境いの地、長井の浦で宿を取ったのであろう。

思えば、4 のたった八首の短歌に、難波津から鞆の浦まで、摂津・播磨・備前・備中の四ヶ国にわたるおよそ二六〇キロの行程が任されてしまっているのは不思議である。そのあとの長井の浦から竹敷の浦までの歌が、備後・安芸・周防・豊前・筑前・肥前・豊岐・対馬の順に、通過した地を一国も欠かさずに登録している事実を知ればなおさらである。さらに、4 から長井の浦停泊の歌へは、一日足らず三〇キロの行程で直結するのに、そのあいだに古歌一〇首が割

って入った形を示しているのも奇妙である。そこで、これに対する井手の見解が示される。

当所誦詠古歌が今日見られるような位置に据えられたのは、使人らの作歌が船の進行に従って年月を追いつ順次記録されはじめてのが、備後国水調郡長井浦に夜泊して以後（三六一二以下）のことで、難波出航後、長井浦までは歌の記録が欠けていたためであろう。そして、その歌の空白部分に当所誦詠古歌がまとめて挿入せられたのは、遣新羅使人らの歌が整理された時のことと思われる。

というのがそれである。卓見である。「難波出航後、長井浦までは歌の記録が欠けていた」という発言からも明白のように、井手のこの見解は、4 の部分もまた、歌群全体が整理される段階でまとめられたものという前提に立っている。たしかに、そう見れば、4 がたった八首の短歌によって四ヶ国二六〇キロの旅程を覆ってしまっている不審も解ける。⁽¹⁾

ならば、この45を後にまとめたのは誰か。いうまでもなく大伴家持である。全体の構成に家持がかかわっている以上、この部分の整理に別の人が入ってくる余地はない。最初に引いた旧稿で論じたように、遣新羅使人歌群の末尾に位置する帰路の歌五首（三七一八～三七二二）は、その多くが、歌群の主題を明確にし全体の物語性を高めるために後に家持によって作り添えられたものと見られ、整理者の加筆を窺わせる最も確かな例である。同じ家持が、この末尾に対応して冒頭の部分にも手を加えることは、いかにもありうることであろう。

ただ、井手は、この部分（具体的には古歌一〇首）について、大

部分が使人たちによって実際に誦詠されたのだが、記録の方は欠いていたので、後に別途資料によって整理したものと考えている。この説に対する考慮はないけれども、その後、井手の線を独自に押し進めたのが、先に掲げた吉井の論考である。吉井は、前半歌群の題詞・左注のありかたや歌群筆録者の実像などの詳細な追求を通して、伊藤のいう末尾五首はいうまでもなく、井手のいう45を含む115四首のすべてが編輯時の家持の挙に出るもので、そこには割合の多くを占めて、家持による新作あるいは転用添加の作が含まれているとし、三六一二（長井の浦）から三七一七（竹敷の浦）までの根幹部にも、家持作その他が家持によって少なからず補入されていると論じた。その具体例については、就いて見られたいが、この辺の見分けはたいへんにむづかしい。悲別贈答歌についての私見は後に述べるとして、ここでは、冒頭四四首を家持の後の整理によるものとする吉井の考察を重視するにとどめる。

遣新羅使人歌群の総題は、本文によれば、

遣新羅使人等悲別贈答及海路慟情陳思并当所誦之古歌
という。ところが、右の三種の圈点部は、冒頭四四首の歌の性格を

規定する左注や題詞をほとんどそのままとめたような形をとる。

すなわち、115を規定する左注・題詞は、

1 右十一首贈答（左注）

2 右一首秦間満（左注）

右一首覽還私家陳思（左注）

3 右三首臨発之時作歌（左注）

4 右八首乗船入海路上作歌（左注）

5 当所誦詠古歌（題詞）

となるのだが、この115の中で主要な部分を占める145の左注と題詞を取れば、ほぼ、先の総題ができあがる。この事実を明らかにした上で、吉井は、2は1の、3は4の付属部分であると規定しつつ、

この冒頭の題詞は普通遣新羅使人歌群全体の総題と考えられているが、区分(2)以下の大部分（注、三六一二以下のこと）が、既述したように時間と場所を基本として展開しており、この展開の基本様式と冒頭の題詞とは異質の立場に立っているといえる。この題詞は区分(1)（注、冒頭四四首のこと）の編輯の時に加えられたものと考えるのが適切であろう。

と論じている。

遣新羅使人歌群の本文では、題詞と認められるものには、5の「当所誦詠古歌」を除き、すべて歌の数を示している。題詞のないものには左注で示している。しかるに、吉井が「題詞」と規定する問題の一文（総題）には歌の数が示してない。したがって、この「題詞」を前半歌群の総題ではないとする見解には賛成できない。そして、拙著『万葉集の構造と成立下』（第八章第三節）で説いたように、本文の編纂にきびすを接して、大伴家持生存時代に作られたと推定される巻十五の目録には、

天平八年丙子夏六月、遣新羅国之時使人等、各悲別贈答及海路之上慟旅陳思作歌并当所誦詠古歌一百四十五首

とあり、ほとんどまったく同じ内容を示す表現がまぎれもなく歌群全体をくくっている。一方、所に当って誦詠した形をとる古歌は、根幹部にもある（三二六五、三二六六）。また、長井の浦以後の歌はすべて海路の作で、「海路にして情を慟^たみして思ひを陳ぶ」る詠

でないものはないと言ってよい。第一、「当所謂之古歌」で終わる一文が四四首の「題詞」でしかないならば、これは、三六〇一、三六一の一〇首を覆う題詞「当所謂詠古歌」と重複してしまふ。吉井のいう「題詞」は、前半遣新羅使人歌群の総題の機能を充分に果しうるといふ観点に立つて据えられたものと見るべきだと思ふ。ただしかし、この一文に、四四首を後に補ったという事情が馬脚をあらわしていることも否定できない。四四首だけの「題詞」ということに固執する点には従いえないものの、吉井の論証が、四四首を家持の後の整理によるものであるとすることの根拠に、きわめて有力にかかわつてくることは疑えない。

本稿が読もうとする悲別贈答歌一首は、見てきたとおり、この四四首の最初に位置する。以上述べたことを念頭に置いた上で、一首に眼を向けてみよう。

三

悲別贈答歌一首が、名実ともに遣新羅使人歌群の巻頭言として置かれ、「秋」には「妹」のもとに帰ることを願う使人たちの共有財産の性格を示しており、最も直接には、末尾に位置する帰路家島の歌五首（三七一八～三七二二）と照応しあうものであることについては、先掲拙著の中で述べた。ここで留意したいのは、別れに際しての男女の贈答でありながら、歌数が「十一首」という奇数を示す点である。贈答が一首対一首でなければならぬ道理はない。けれども、第一首から第八首まで、女と男の一对一の贈答をきれいに持続させるこの一一首にあつては、奇数はきわめて不審で、問題の鍵は終わりの三首が握っている。

- (1) 武庫の浦の入江の洲鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし（三五七八）
 - (2) 大船に妹乗るものにあらませば羽ぐくみ持ちて行かましものを（三五七九）
 - (3) 君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ（三五八〇）
 - (4) 秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ（三五八一）
 - (5) 大船を荒海に出だします君障むことなく早帰りませ（三五八二）
 - (6) ま幸くて妹が斎はば沖つ波千重に立つとも障りあらめやも（三五八三）
 - (7) 別れなばうら悲しけむ我が衣下にを着ませただに逢ふまでに（三五八四）
 - (8) 我妹子が下にも着よと贈りたる衣の紐を我れ解かめやも（三五八五）
 - (9) 我がゆるゑに思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ（三五八六）
 - (10) 栲衾新羅へいます君が目を今日か明日かと齎ひて待たむ（三五八七）
 - (11) はろはろに思はゆるかもしかれども異しき心を我が思はなくに（三五八八）
- 右(1)～(8)の、女と男の贈答一組ずつの連続において、常に女が先立つのは、悲別贈答においては、留まる女の方から先に歌を贈るといふ習わしがあつたことによるものらしい（巻十二「悲別歌」三一

八〇〓三二一〇など参照)。そして、(1)(2)が宿命の離別に対する恨み、(3)(4)が大船の行く先を思うての悲嘆、(5)(6)が無事なる帰還(再会)に対する予祝と願望、(7)(8)が形見の衣を通しての再会の誓いという次第になっており、筋の流れのようなものをすなおに追うことができる。

が、(9)〓(11)がむづかしい。これに関しては、古来、次のような説がある。

イ男(9)——女(10)(11)の贈答をなす(萬葉代匠記以下)

ロ男(9)——女(10)——男(11)の贈答をなす(万葉集新考以下)

ハ(9)は独立する男の贈歌だがそれにかかわる女の歌はなく、(10)(11)は留まる女の立場の歌(万葉集私注)

ニ(9)は男の答歌で前の女の贈歌が脱落したもののか。(10)(11)は女——

男の贈答(古典大系本萬葉集)

旧稿では、一一首の構成をどうとらえようと、それが男女の「秋の再会のための誓約」であることは動かないという読み(「一八・二〇頁など」)に満足し、私注の説にいちおう従いつつも、代匠記以下の考えが最も穩当かもしれないが、別に、(9)(10)を男——女の贈答、(11)を整理者(家持)の補った歌と見る考えも成立しようとして論じ、「いずれにしても、本稿の論旨に影響はない」と書いた(三三頁注2)。しかし、これは、冒頭一一首の重み、冒頭一一首と末尾五首との照応を説く論述においてはやはり細やかさを欠いていたといわなければならない。

大浜真幸は、この点を突き、一一首を前半歌群の巻頭言、使人たちの共有財産と認めるならば、こうした姿勢で通過すべきではなからうとし、以下に述べるような新見を提示した。

(9)は、(8)までに提示された、送る側(女)の諸要求の中で最も関心度の高い要求(秋のうちに帰ってほしい)を作歌の契機とし、その要求に答えるべく詠まれた男の歌である、これに対し、(10)は、旅立つ者(男)の最大の関心事である潔斎を作歌の契機とし、その要求に答えるべく詠まれた女の歌である。そして、最後の(11)は、それ以前にすでにうたわれていた、男女相互に共通する要求(男女相互の身の慎み)に対する解答を再度くりかえす歌、つまりは、男女両性の歌、一首で二首分の機能を果す歌として置かれたもので、その意味で贈答悲別歌の納め歌としての必然の風貌を背負って立つというのが、それである。大浜は、(9)と(10)が一転して男——女の贈答に変わった理由について、(9)(10)の贈答の質が(8)以前とは異なっていることを、外形を通して享受者に気づかせようとした点にあるとも論じ、さらに、一一首の構成について、不可避な別離という悲別贈答の前提を提示する(1)(2)が起、それを承けて、別離の諸相をうたう(3)(4)・(5)(6)・(7)(8)が承、対応軸の転喚故に贈答の質および形式の転喚が認められる(9)(10)が転、歌群の歌い納めである(11)が結という、「悲別」にかかわる贈答世界の流れがあるとしている。

これは、一一首を綿密に読み解いたすぐれた考察で、ほぼ全面的に首肯することができる。ただ、この一一首の構成を説くにあたっては、触れておくべき重要な事柄が、すくなくとももう一つある。それは、一一首における地名の様相である。

一一首には、二ヶ所だけに地名が登場する。(1)と(10)、つまり、純粹に贈答を構える一〇首の歌の最初と最後だけに布石されている。

しかも、その地名は、(1)においては、使人たちが難波津を出航して、この時はじめて停泊したと察せられる「武庫の浦」(難波津か

ら約二〇キロ）であり、⁽¹⁰⁾においては、遠い海路を越えて使人たちが到り着かねばならぬはるかなる目的地「新羅」である。行程の最初の地と最後の地とが、純粹に贈答を構える一〇首の最初と最後に据えられているのは、暗合ではけつてあるまい。

そもそも、本来羈旅歌群でもある遣新羅使人歌群には、当然の帰結として、あちこちに地名に対する深い関心がはりめぐらされている。たとえば、地名「武庫の浦」は、先に示した4の歌群八首の第二首にも現われるけれども、これは、澤瀉久孝（萬葉集注釈）の指摘にもあるように、悲別贈答歌(1)の「武庫の浦」と響きあうものである。その八首は、

潮待つとありける船を知らずして悔しく妹を別れ来にけり（三五九四）

朝開き漕ぎ出て来れば武庫の浦の潮干の潟に鶴が声すも（三五九五）

我妹子が形見に見むを印南都麻白波高み外にかも見む（三五九六）

わたつみの沖つ白波立ち来らし海人娘子ども島隠るみゆ（三五九七）

ぬばたまの夜はふけぬらし玉の浦にあさりする鶴鳴き渡るなり（三五九八）

月読の光を清み神島の磯間の浦ゆ船出す我れは（三五九九）

離れ磯に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも（三六〇〇）

しましくも独りありうるものにあれや島のむろの木離れてあるらむ（三六〇一）

という。この八首において、最後の二首は、先にも述べたように、「むろの木」に「柄の浦」を匂わしたもので、地名を持つ歌と見てよい。また、最初の歌は、難波津を船が動き出した時の歌であることが明らかであり、これも地名をはっきり知覚させる作である。したがって、ここでも何としても地名を感得しがたいのは第四一首だけとなる。八首を①～⑧の記号で表わし、その様相を示せば、

①〔難波〕

②武庫の浦―摂津（畿内）

③印南都麻―播磨（山陽道近国）

④

⑤玉の浦―備中（山陽道中国）

⑥神島―備後（山陽道中国）

⑦柄の浦

⑧柄の浦―備後（山陽道中国）

のようになる。これによれば、八首は、山陽道近国以前の①～④と山陽道中国の⑤～⑧とに分れ、難波津から出航した使人一行の船が、摂津・播磨を経て、波立つ内海を航行し、さらに山陽道中国の備中・備後へと旅して行く図を地名によって表示しているといえる。④は、おそらく、むしろ地名を示さぬことによって、播磨と備中の間、すなわち、備前の海岸線を航行していくことを暗示しようとしたのであろう。何とも心にくい図である。

一方、「新羅」（韓国）の名も、根幹部の挽歌群（A三六八八～三六九〇、B三六九一～三六九三、C三六九四～三六九六の三群）に登場する（Aの最初とCの反歌二首）。これも、Cの、

昔より言ひけることの韓国のからくもここに別れするかも（三

六九五)

新羅へか家にか帰る老岐の島行かむたどきも思ひかねつも(三六九六)

は、行く先の地名を詠みこむことで、Aの冒頭「すめるきの 遠の朝廷と 韓国に 渡る我が背は」に應じつつ、対馬を経て「新羅」へ向かうのに茫然自失、行くあてもないとうたったそのありようが、同時に、以下の対馬の歌群へのつなぎの役目を果している。(4)

右二例は、ほんの一端である。こういう地名への心配りによれば、当面一首の地名のありかたを偶然の配合といってしまういわれはないというべく、悲別贈答歌の(10)は、(1)の「武庫の浦」に対して、目的地「新羅」を示すことで、一連の贈答を閉じたもので、ここの地名は、起と結、発信と受信の関係にあるといえてよい。これは、別の言い方をすれば、女に始まって女に終わる図、女そのものの、男の行く先に対する関心を地名の配合によって語る図でもある。(9)(10)だけが男—女の贈答になった主な理由は、むしろこの点にあったのではあるまいか。そして、ここで注意すべきは、(10)で遠い目的地「新羅」が示されたことが、男女誓約の(11)の「はろはるに思はゆるかも」と緊密に響きあい、「異しき心を我が思はなくに」という決意の程を高めるに至る点である。こう見れば、(11)が悲別贈答の総まとめをなす歌で、男女双方の誠実を誓いあう歌としての布石であることは、いよいよ明らかであろう。

四

以上見てきたように、一首の構えは見事である。一首が、送別の宴などで、贈答という名のもとに掛け合わされたものだと

も、そういう自然発声の詠誦の中からこういう構図が生まれてくることは、ちょっと考えにくい。実際に「贈答」しあったものとすれば、なおさらである。

ここには、埋もれた作者、つまり、先に言及した巻十五の整理構成者と推察される大伴家持がいるはずで、地名をもって対応しあう(1)(2)と(9)(10)、およびそれと深くかわる(11)とは、ほとんど疑いなく整理者のものである。また、根幹部の国名の記載法から帰納すれば、(3)(4)も整理者のものである蓋然性が高い。

この根幹部においては、備後以降、経て行く国々の歌について、その国に入った最初の歌群に国名を冠し、以下、その国での歌が続くばあい、国名は記さないという方式をとるのを原則とする。しかし、例外が二つある。次に示すAとBがそれである。

備後国水調郡長井浦 (三六一二) 三六一四
(安芸国) 風速浦 (三六一五) 三六一六) …………… A
安芸国長門島 (三六一七) 三六一八)

長門浦 (三六二二) 三六二九)
国防国玖河郡麻里布浦 (三六三〇) 三六三七)

大島鳴門 (三六三八) 三六三九)

熊毛浦 (三六四〇) 三六四三)

豊前国下毛郡分間浦 (三六四四) 三六五一)

(筑前国) 筑紫館望本郷 (三六五二) 三六五五)

(") 七夕詠 (三六五六) 三六五八)

(") 海辺望月 (三六五九) 三六六七)

筑前国志摩郡韓亭 (三六六八) 三六七三)

引津亭 (三六七四) 三六八〇)

B

肥前国松浦郡粕島亭（三六八一～三六八七）

壱岐島（三六八八～三六九六）

対馬島浅茅浦（三六九七～三六九九）

竹敷浦（三七〇〇～三七一一）

ところが、この例外Bは奇しくも、先の吉井の考察によって、家持の加筆補入の非常に濃厚な部分であると指摘された個所である。また、Aは、

我が故に妹嘆くらし風速の浦の沖へに霧たなびけり（三六一五）

沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧にあかましものを（三六一六）

とうたうもので、根幹部の中で、最も絶妙に、いわば、付きすぎるくらいの見事さで悲別贈答の(3)(4)と響きあう。これは、霧を靡かせ霧を呼ぶ「風速」の地名に興をひかれて整理者家持が創り添えた歌にちがいない。だからこそ「安芸国」を冠する個所にずれを生じてしまったのであろう。とすれば、これに対応する、「秋」の歌の原点ともいふべき(3)(4)も家持の手による歌であった蓋然性が高い。

遣新羅使人歌群には、筆録者であったと推定される録事（注1参照）の書きとどめた原資料の中に確実にあったと見なされる歌として、

竹敷の黄葉を見れば我妹子が待たむと言ひし時ぞ来にける（三七〇一）

というような歌がある。「秋」のうちに帰郷の身となるというのは、使人たちや妻たちのあいだに実際に交された期待であり願望であつたらしい。事実、六月一日に難波を出発したとしても、四ヶ月後の

九月（秋の終わり）には、充分帰国できるのが当代遣新羅使の普通の状況であった。だから、こういう歌があるのは当然で、かような歌を含み持つ原資料を眼にしたことが、整理者家持をして、歌群全体に「秋」のうちに「妹」のもとへの主題をほどこす着想を抱かせたのであり、(3)(4)やAの歌などは、その着想を实らせた一例であつたと察せられる。

こうして、(1)(2)・(3)(4)・(9)(10)を除くと、無事なる帰還を祈りかつ期する(5)(6)と、その無事なる帰還、つまり再会が叶えられることを形見の衣に託す(7)(8)との二組だけが残る。二組は内容の上で密接に関連し、かつ、他の組に比べてすこぶる現実的で、別れる男女のあいだにいかにも存在しうる贈答である。「形見の衣」が男女の別離にあたつて実際に交換される習いがあり、そのことに関する歌が男女悲別の歌として万葉集にたくさん登録されていることについては、いまさら説く必要もあるまい。「末長く」あることを祈ることも、人麻呂集の言挙げの歌（三二五三～三二五四）や憶良の好吉好来歌（八九四～八九六）などに徴するに、人の離別にあたつての常の行為であつたことが知られる。

このように見てくると、おそらく同一の男女によって実際に交された(5)(6)・(7)(8)の二組が根幹部の実録とは別途の資料としてあつて、それを軸に、今日見るかたちに織り成したのが、当面の悲別贈答一首であつたと推測される。そして、このような読みを重ねてゆくならば、原資料と整理者の添加作との振分けが次第に可能になってくるように思われる。たとえば、冒頭部四四首中の3においては三五九三が、4においては三五九九などが、それぞれ原核となつて今日見るふくらみを見せたのではないかと読めるふしがある。

それにしても、当面の二一首において、集中類例を見ない(1)のような男女双方の誓約を示す歌が置かれたのは、なぜだったのであろうか。特異な操作であるだけに、ここには何かいわれがあるにちがいない。

これは、かならず、歌群の末尾に、帰路家島の五首を補ったことと密着している。ただし、この五首の中にも核となった別途資料の歌がなかったと言いきれない。

筑紫を廻り来て、海路にして京に入らむとし、播磨の国の家島に到りし時に作る歌五首

家島は名にこそありけれ海原を我が恋ひ来つる妹もあらなくに

(三七八)

草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の経ぬらく(三七

九)

我妹子を行きて早見む淡路島雲居に見えぬ家づくらしも(三七

二〇)

ぬばたまの夜明しも船は漕ぎ行かな御津の浜松待ち恋ひぬらむ

(三七二)

大伴の御津の泊りに船泊てて龍田の山をいつか越え行かむ(三

七二)

これが家島五首だが、先掲拙著でも論じたように、ここには、風波の難や鬼病の災厄に遭遇し、約束の「秋」にはついに帰りなえなかったけれども、年を越えて(三七一九参照)ようやく播磨に到着し、「妹」との再会を目前にしつつ船路を急ぐ一行の姿がある。それは、「秋」なる誓約は果しえなかったけれども、「妹」そのものとの再会、つまり冒頭悲別歌への帰結が今まさに実現されようとしてい

ることの描写である。この姿は、見かたを深めれば、「しかれども異しき心を我が思はなくに」と誓いあった男女のその真心が通じあうことを確約する姿であるといえよう。不運にして「秋」の再会は逸したけれども、はるばると留まって待ち焦れたものにも、はるばると旅して郷愁にむせんだものにも、「異しき心」を持たなかった果報だけは見舞いつつある図といえるであろう。とすれば、家島五首は、冒頭悲別贈答歌への帰結であることはまちがいないのだが、中でもとくに、その納め歌(1)に最も深く帰着するということになる。(1)が、集中類例のない姿勢をもって据えられた所以であろう。

そして、なお言うことが許されるならば、

はるはるに思はゆるかもしかれども異しき心を我が思はなくに

(三五八)

という納め歌は、「しかれども」の一語に心ひそめつつ読むなら、「思えば、何と遠く久しく離れ離れになることか。しかし、いかにどんなに離れていても、あだし心など持つわけがない」という意と見るべく、かりに「秋」の再会が果されずはるばると別れ住むようなことになってもという気持が言外に封じこめられている。とすれば、家島五首が、まさに、「秋」をはるばる越え去っての、しかし、声援を送らないではいられないような帰郷詠草であるという事情のもとでは、五首とこの納め歌との照応はいよいよ深まりまることになる。

遣新羅使人歌群の原資料を追えば求めるほど、そこに張りめぐらされた創作性・物語性の厚みに敬服しないわけにはいかず、つけても、かつて大浜蔵比古(「巻十五」萬葉集大成4昭和三十年二月)が、この歌群を「実録的な創作」と呼んだ着想の高さを思わ

ないわけにはいかない。(昭和五十七年五月四日稿)

(1) 使人らの正式な歌稿が備後長井の浦から始まる理由は不明。難波津を出て約十日(古典文学全集万葉集4、五二二頁)、名立たる難所「神島」を通過し、山陽道中国備後と山陽道遠国安芸との国境いともいふべき「長井の浦」に無事宿泊したゆとりに由来するものであろうか。吉井巖は私注などの発言を実証して、この記録者を一人の録事であったとし、その記録は備後長井の浦から対馬竹敷の浦までしかなかったとしている。正式な記録が長井の浦から竹敷の浦までであったということは認められるように思う。がそうだった理由についての私見は、吉井と見解を異にする。詳しくは、別稿「萬葉集巻十五の原核——遣新羅使人歌群をめぐって——」(川口久雄博士古稀記念『古典の変容と新生』)に譲る。

(2) 「付属部分」という言いかたは気になるが、この歌二首は、曲り道をとらず、直線の「伊駒山」を一途に超えて、「妹」(冒頭悲別歌群)のもとへ一時帰る歌で、その点一首と組をなすといつてよい。また、3の三首は、出発実際の歌だが、直接には次の八首(4)の伏線になっており、三首の予感を実証したものが八首であるという表現形態をとる。ということは、三首が全航路に対する前提となるということでもある。3と4とが組であることは疑えない。この点も、別の機会をまつ。

(3) 私注の説はややあいまい、前後の文脈から、40回を独詠歌と解しているものと見た。

(4) 反歌第二首の上二句の解には異説がある。悼む者の心境を述べた表現ととる。なお、BCは、「作者不明歌十作者明記歌」の順になっていて、巻十五の中でただ一つ異例。整理者の補入であろう。この点は別の立場から、吉井巖がすでに指摘している。